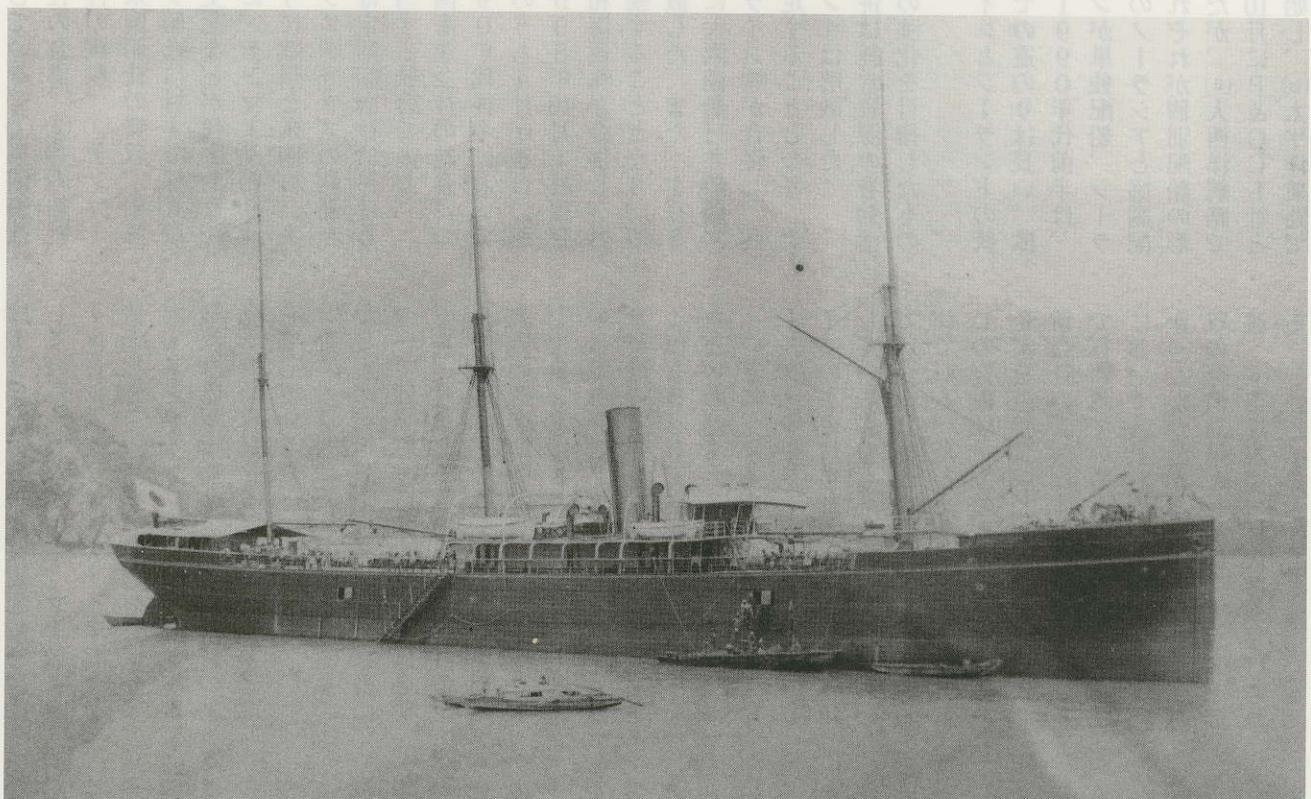


広瀬武夫とともに 旅順港口に沈んだ 北前船主・右近家の汽船

文・山田廸生(日本海事史学会副会長)



旅順港閉塞隊記念碑。錨は福井丸のもの（筆者所蔵絵葉書）



福井丸（「北前船主の館 右近家」蔵、加藤庸二氏複写）

福井丸

《主要目》 貨客船、鉄製、右近権左衛門所有、総トン数2,943トン、長さ97.6メートル、幅11.9メートル、主機2連成汽機1基、出力241公称馬力。明治15年(1882)3月サンダーランド造船所(英サンダーランド)で建造。明治27年(1894)右近権左衛門が購入。明治37年(1904)3月、日露戦争の第2回旅順港閉塞作戦に参加し自沈。前名アバーゲルディ Abergeldie

「杉野はいづこ、杉野は居ずや」

前号に続いて日露戦争の旅順港閉塞船の話題である。じつは、「福井丸」は94年1・2月号の本連載でとりあげた。が、前稿では、2本マストの2代目「福井丸」の写真を掲載してしまった。執筆当時、2代目の写真が初代「福井丸」のものとされていたからだ。

その後、初代「福井丸」の写真が世に出た。こちらは3本マストである(前頁下の写真)。

どちらも英國から買つた中古船だが、2代目が4189総トン、明治23年(1890)建造の鋼製汽船である。船主はともに福井県河野浦の北前船主・右近家。初代が旅順で沈んだので、2代目を買つたのである。

旅順港閉塞は、ロシア太平洋艦隊を旅順港内に封鎖するため、港口の水路に商船を自沈させようとした作戦である。開戦の年(明治37年)の2月から5月にかけて3回おこなわれ、21隻の商船が参加、17隻が自沈した。

広瀬武夫少佐(当時)の「福井丸」が出撃したのは第2回である。実施したのは3月27日未明。作戦に参加したのは、総指揮官有馬良橋(りょうきょう)中佐が乗る「千代丸」と、「福井丸」「弥彦丸」「米山丸」の計4隻である。すでに海軍に徴用されていた4隻は、3月

初旬に大阪で石材を満載(自沈後、ロシア側による引揚げを困難にするため)。呉で防禦砲、自爆装置を装備したのち、朝鮮半島北西岸にて終結。次いで、同じ海域の連合艦隊根拠地に移動し、護衛艦隊に合流した。

護衛艦隊とともに出撃したのは3月26日である。そして27日未明、水雷艇隊をともなつて旅順港口に向かい、「千代丸」を先頭に、前述の順の単縦陣で突入。ロシア側の探照灯照射とはげしい砲火のなかで自沈した。

指揮官広瀬を含む18人が乗組んでいた「福井丸」は、自沈作業中、敵艦の魚雷を受けた。混乱のなかで指揮官付の杉野孫七上等兵曹(当時)が行方不明になり、広瀬は3たび船内を捜索。それを断念し、ボートに移乗してまもなく敵弾を受け、壮烈な戦死をとげた。映画やTVドラマで有名な場面である。

汽船を導入した北前船主

初代「福井丸」は、英アバディーンの船会社が運航する貨客船「アバーゲルディ」として、明治15年(1882)にサンダーランドの造船所で誕生、豪州・ハワイ方面への航路に就航した。船籍港はアバディーン。船名は船籍港にちなんでいるのだろう。

右近家が買入れたのは、海外資料によれば明治27年(1894)である。船名録(前年末時点で収録)には明治29年版から記載されており、この放置された銅像を見た記憶がある。

右近家は同船を、おもに日本海航路に投入した。つまり、北前型弁才船が稼働していた航路に使つたのだ。右近家は、石川県瀬越の広海家・大家家、富山県東岩瀬の馬場家などとともに、汽船を導入した北前船主である。

これらの船主たちは、家業の帆船運航を続けたかわら、汽船運航に着手し、近代的な海運経営に家業の存続をかけたのである。

「福井丸」が海軍に徴用されたのは、開戦の年の1月である。旅順港口での戦没に対する賠償金はむろん、国から出た。右近家はこのカネで2代目を買つたのである。

前頁上の写真は、旅順港口にあつた旅順港閉塞隊記念碑である。錨は福井丸の遺品で、日露戦争後、日本が引揚げたものだ。記念碑は第2次大戦後撤去された。錨は現在、旧旅順監獄の建物で展示されている。引揚品にはこのほか、広瀬が「決死隊」とベンキで大書した舷側板があり、明治末年、これをはじめ込んだ記念碑が大阪の住吉大社に建立された。が、これも第2次大戦後撤去された。

広瀬と杉野の銅像も神田須田町に設置された。広瀬と同じ大分県竹田出身の渡辺・朝倉(文夫)兄弟の制作である。この銅像も戦後撤去され、いつとき交通博物館の敷地に放置されていた。筆者は子供のころ、父と一緒にこの放置された銅像を見た記憶がある。